

紹介文(合作・受講者の掲載許可済み)

伊藤亜聖『デジタル化する新興国』

『デジタル化する新興国』（経済学者・伊藤亜聖）は、何気なくスマートフォンを使っている高校生にこそ読んでほしい一冊である。通常、デジタル化が論じられる際、その対象は先進国だが、著者が目をつけるのは、忘れられがちな新興国である。著者は、様々なデータや資料に基づいて、デジタル化によってもたらされる可能性、脆弱性のどちらにおいても、実は、先進国よりも新興国の方がより大きいことを示す。またデジタル化は、人工知能 (AI) 技術や通信システムなど、好意的に紹介されることが多い。そのため、デジタル化によって生活が便利になるような印象をもつ人が多いだろう。しかし著者はその危険性を論じることを忘れていない。

新興国は、いま、工業化とデジタル化という二つのフェーズにある。前者のフェーズにおいては、新興国は先進国で開発された技術を用いて加工し、それを輸出するだけである。だが後者のフェーズでは、広大な現地市場という利点を背景に、新興国自身が活躍の担い手となることで、新興国こそ、新たなデジタル技術を用いたサービスの苗床になっているのである。

本書の後半部分まで、日本について書かれていないことに驚いた。本書で紹介される新興国の斬新なアイデアを読むと、日本はデジタル社会に乗り遅れているのではないかと心配になる。日本は先進国であると思っている人には衝撃的な内容だろう。現在の国際情勢はめまぐるしく移り変わっているが、特に、デジタル分野においては「先進国」と「それ以外」で分けられるほど単純なものではない。徐々に力をつけるデジタル新興国に、日本はどれだけ協調し、学びを得られるのだろうか。考えていくのは他の誰でもない私たちだ。日本は先進工業国と課題先進国という二つの立場から、新興国と途上国の架け橋となるべきだろう。

中川毅『人類と気候の 10 万年史』

近年、地球では大規模な気候変動が起きている。そのため私たちは、地球の歴史をもとに気候変動の傾向を掴み、今後の環境を守るために行動をする必要がある。地質学者・中川毅による『人類と気候の 10 万年史』は、この点について考える格好のヒントになる。

この本には専門用語も交じっているため、内容を理解することは難しいかもしれない。だが、温暖化は全世界の人々に関わることなのだから、全世界の人びとに、自分たちの住む地球に対して新しい見方をもつために、是非一度、本書を読んで欲しい。また、本書には、地理で習うケッペンの気候区分、地学基礎で出てきた先カンブリア時代の地球の姿や地軸の傾きにより季節が生まれること、生物基礎で習う針葉樹林、照葉樹林など日本の森林分布な

ど学校の授業と関連する部分もある。このため、これらの授業を受けている高校生なら、わりと読みやすいだろう。加えて、このような授業を履修していない者であっても、未来の地球を守る高校生は、地球がどのような過去をたどり、どのような未来を描いていくのかを知るために、本書を読む必要があるだろう。

著者によると、福井県にある水月湖には 7 万年分もの年縞がきれいに溜まっている。これは世界的に見ても珍しく貴重であると同時に、地球の過去を知る上で重要な役割を担っている。その年縞に付着していた花粉をもとに過去を見てみると、水月湖周辺は今の西日本を中心に広がる照葉樹が林立したり、北海道やロシアなどを中心に広がる針葉樹が林立したりと大きく気候変動していたことがわかる。

筆者は、人は、一般に、提示された学説が「『本当らしく』見える」という。私たちは提示される説を鵜呑みにするのではなく、自分なりの意見を持ち、どのような対策が妥当かを考えなければならない。たとえば農業には意外な一面があることを知っているだろうか。農業はとても環境に優しい産業だと一般に思われている。しかし、実際には自然に抗った非常に不安定なものだった。農業には植物としての多様性が欠けていて、多少の気温のズレですぐにだめになってしまう。そのため、気候のズレで受ける影響の少ない狩猟採集にも手を打つ必要が出てくるかもしれない。本書にはこの他にも、今までの知識や常識とは全く違う新たな視点で書かれた箇所が多くある。きっと多くの読者にとっても驚きがあるに違いない。

本書の読者は、ここ数年よくニュースで取り上げられ、問題となっている地球温暖化について、10 万年という長い期間で見ること、今までとは違う印象をもつはずだ。ニュースなどでは 100 年単位などのグラフを使って、今の異常な温暖化ぶりを浮き彫りにしているが、この本では地球の今までの気候変動の歴史から今がどういう時代か、本来はどうであるべきなのかをグラフとともに読み解くことができ面白い。

筆者は近年の温暖化という不測の事態を地球の歴史をもとに傾向を掴み、知恵を働かせ、これからの地球のためにどのような行動が必要か考えるべきだと主張している。私たち高校生は、これからの社会を様々な方向から支えることを求められる世代だからこそ、気候変動について新たな見方を持ち、温暖化だけでなく色々な地球問題について考え直すべきだろう。

川嶋みどり『看護の力』

皆さんは看護師と聞いて、医師のアシスタントというイメージをもったことはないだろうか。川嶋みどり著『看護の力』は、看護および広く医療業界を目指す学生はもちろん、医療を受ける可能性のある人であれば、誰が読んでも、看護師という仕事の真髄を正しく理解する助けとなる良書である。

著者は実際の患者の例を挙げながら、看護のもつ本当の力について説く。看護師の仕事は、診療の補助に限らず、患者の自然治癒力を引き出すことにある。そのために看護師は、手で

触れあい、よく観察して、患者が人間らしい生活をすることを整える必要がある、という。そのような看護を阻害するものは何か。著者は、看護現場の慢性的な人手不足を問題視する。人間本来の自然に治る力に看護師が働きかけるためには、人間らしいケアの可能な医療現場を目指して、看護師が働く条件を整える努力が必要だ。したがって著者は、機械や市場原理に振り回され気味な現在の医療システムに異を唱える。

本書が説得力をもつのは、最先端の医学よりも目の前の患者にかかわる豊富なエピソード、事例が紹介されているからだ。たとえば、医師に脳が死んでいて、意識は戻らないと宣告された患者の例が挙げられている。このような患者に対して、ある看護師は毎日欠かさずケアをしたという。彼女のケアによって 45 日後に意識が回復し、社会に復帰できた。著者はこのエピソードから「医師の宣告に左右されて早々と諦めるのではなく、最後までその人の命の可能性を信じてケアをすること」が大切であるという教訓を語る。脊髄の悪性腫瘍がある少女の垢を取り続けた看護の例も感動的だ。このような看護の目的は患者を清潔に保つということだけではない。呼吸をする、ご飯を食べる、排泄する、動く、止まるなど、私たちが当たり前に行っていることこそが、私たちの命を守っていることを思い出させてくれる。読者は、このような記述から、看護師が患者に親身に寄り添うことで助かる命、生きる希望があること知るだろう。

本書を読んで教えられ、また考えたことは、看護は看護師だけの特権でなく、私たちの普段の会話、動作なども看護である、ということだ。看護師に限らず私たちも、著者のいう「治る医療」を日常生活でも行えるのだ。とはいえ、このような「治る医療」を実践するには、川嶋のような看護経験豊富な者の声に耳を傾ける必要がある。だからこそ、看護師という職業が、決して医師の従属部ではなく、患者に寄り添う誇りある、独立した仕事であることを本書は実感させてくれるのである。